

読むことの振り付け師



松枝 到

翻訳書に限らないが、本を読んでいるカタカナ語にふち当たり、はて、なんの意味だったかなと悩むことがある。ある翻訳書を読んでいたとき、なかに「コレグラフィー」という語が注釈なしで飛び出てきた。前の方に説明があったかと思直してみたが見つからない。残念ながら索引のない本だったし、電車のなかでもあり、とりあえず電子辞書で当てずっぽうに引いてみた。しかし、わからない。研究室にたどり着き、さっそく検索エンジンにカタカナを打ち込むと「もしかしてコレオグラフィー？」と出た。とたんに疑問は氷解。chorégraphieのことだった。すなわち踊りの「振り付け」。フランス語では確かに「コレグラフィー」なのだが、一般的には英語の choreography の方が通用している。気がつけばなんてことないのだが。

ch-ではじまる語なので、調べるとやはりギリシア語源。合唱歌舞団の踊り (*khoreia*) に由来するものようだ。しかしカタカナで「コレ」といわれると「col-」というラテン的な綴りに引きずられてしまう。すると思い出せるものではない。とはいえ、これが経済学の専門用語だったら、はなから投げ出していただろう。なんとなく聞いたことがあるような、というレベルなので、もたえるのである。

もちろんこうしたことは、別の次元にもある。入試だ卒業判定だという時期になると、立場上、かなりの数の固有名詞と向きあうことになるのだが、いかにも不思議な読みの姓名がある。特殊な文字の例は措いておくが、むしろありふれた字で読みに苦しむものに興味が湧く。たとえば「大」と書く名前に当てられた読みには、まさる、ひろし、はじめ、などがあつた。もちろん調べればこうした用例は多いのだろうが、現場

では読みに苦しむことも少なくない。扇緑を「せいら」と読ますなどは、最初は面食らうものの、一度わかれば悩まない。意味わかんないけどそう読んでほしいのね、と了解できた。もちろん固有名には独特の世界があるので、一概にどうともいえないのだが、アルファベットの世界にはないおもしろさではあろう。

しかし、まあ、読書を一端立ち止まらせる語との出会いは、とても貴重な体験である。というか、すべての単語について、ぼくたちはそうした体験を持っているはずだったのに、いつのまにかその出会いの衝撃を忘れ、あたりまえの風景にしてしまっている。小学校のころだったか、初めて学校でローマ字を習い、自分の名前をアルファベットで書けた喜びに舞い上がり、家に帰って父に「ぼく、ローマ語を習ったんだ」といった。すると父は笑って母に「聞いたか、この子はもうローマ語ができるんだそう」といった。そのときは意味がわからなかったが、くそっ、まだぼくは「ローマ語」をものにしていない。

ある人の文章に「肩越しに読む」という一句を見つけた。なにか古典の文献を読んでいるとき、その一語一語をたどっているぼくの背後から、肩越しに、さまざまな文化・文明を生きた無数の注釈者・解釈者たちがぼくと同じ語をたどり、あれこれの読みを投げかけてくる。誰かのいつかの小さな注釈がぼくを語の前で立ち止まらせる。そしてぼくはより大きく多様なテキストを「顔を上げて読む」(ロラン・バルト) ことをはじめるのだ。これこそが読書の醍醐味であるというのなら、ぼくをひととき立ち止まらせたカタカナ語にも感謝すべきなのかもしれない。

(まつえだ いたる・和光大学教授)